

■ 編集だより

編集後記

編集委員会の帰り、最寄りの本郷三丁目駅までの道すがら、また東京駅までの地下鉄乗車中に、同じ編集委員の先生に呼びかけられて同行することがある。筆者は当委員会には2013年12月からの新参者、会議では頼りなくおどおどしているの、励ましの意味もあって声をかけてくださるのかもしれない。たわいない話になる。当日の天候、先ほどの会で発言するほどでもなかった査読論文のちょっとした感想、それぞれの職場の近況など。一通りの会話が途切れると、精神病理学的话题を選ばれる先生が多くいらっしゃる。もちろん社交辞令ではあろう。それでも、こんな機会であれば親しくことばを交わすこともない他の専門領域トップレベルの優秀な先生ばかりである。

「重厚長大難解な精神病理の論文が、あの先生（筆者ではない）の査読でこういうことかと、ようやく理解できた」「臨床では個々の症例の精神病理を皆で検討することが有益なので、症例検討会を大事にしている」「精神病理の話がわかりやすくて、エッジの効いた若い先生をご存じではないですか」「精神病理学会はどんな雰囲気ですか。怖くはないですか」。短時間なので、話柄が展開する前に「それでは、また」とお別れすることになりがちだが、他分野の先生方が精神病理学に関心を持ってくれているのを知るの、筆者にはありがたい。

編集会議で常々確認される本誌編集のコンセプトは、伝統ある精神神経学雑誌の権威は維持しながら、読者により親しみやすい雑誌にすること、症例報告、原著論文など臨床に役立つ論文をできるだけ掲載していくということである。先輩編集委員の上記の何気ない一言も、その編集方針に裏打ちされた、精神病理学的論文著者への期待のあらわれと見ることもできる。読んで面白く、臨床的に有用な精神病理学の若手の論文は出てこないですか。40年前になってしまうが、笠原・木村分類で有名な「うつ状態の臨床的分類に関する研究」は本誌に掲載されたものである。実用的であるのと精神病理学は矛盾しない。この分野の症例報告、原著論文の投稿数増加を切に願う。

純粋な編集後記を以下に。本稿執筆時点は4月、平成27年度第1回編集会議の後である。今会議の大きな議題は、今月（6月4～6日）開催される第111回日本精神神経学会学術総会57題のシンポジウムから、本誌特集原稿とするテーマを、各分野バランスよく選択することだった。熱心かつ慎重な審議を経て、「DSM-5のインパクト——臨床・研究への活用と課題」「本学会の『沖繩精神科医療委員会』活動の検証——50年が経過して」「精神疾患をもつ女性の妊娠・出産を支えよう」など17題が選ばれた。

第111回総会からの「特集」は117巻10号より掲載予定である。ライブで聴講された方も、残念ながら出席できなかった方も、講読を楽しみにお待ちください。なお、シンポジウムの特集原稿と原著論文に対する査読の差を問題にする議論も以前あったが、現在ではシンポジウムの特集原稿にも1人の責任査読者が介入することになっており、その質も担保されている。

最後にリマインドとして、編集後記でこれまで繰り返しお伝えしたことを、もう一度お知らせする。2015年1月号（第117巻第1号）より、精神神経学雑誌は、オンラインジャーナルを基本として発行している。本稿をオンラインでお読みの方で、「あれ、雑誌が最近送られて来ない」とお気づきになり、やはり雑誌郵送をご希望であれば、今からでも学会HPよりお申し込みいただける。また、一度オンラインのみとしても希望によって郵送を再開することができる。個人会員は、郵送の場合もオンラインジャーナルはご利用いただける。

ご理解・ご協力の程、何卒よろしくご願ひ申し上げます。

西岡和郎